

付喪の盾の迷走記

著 10式戦車

絵 fat

「おーい。うっん、やっぱり駄目かなあ」
 途方に暮れた様子の声が聞こえた。はて、彼女は何を困っているのだろうか。背中と頭を何か硬いものが押している。何か固い地面の上に寝ているのだと見当が付いた。私が目を覚ませないことに困惑しているのだろうか。ありがたいことだ。私は目を開けた。

「わ、良かった良かった。やっぱり私の見立ては正しかったなうっ」
 先方は一人でなにやら納得しているようだ。私は彼女を観察する。緑の帽子に水色の髪、そして同系統の色の作業服。胸元には鍵が吊られている。私の視線を感じて、彼女は私を置いてけぼりにしていたことに気づいたようだ。

「ああ、いめんどめんど。あなた、名前は何？」
 はて、そういえば何だったろうか。立ち上がりながら考え込む。

「わからないのか。……待てよ、そういえばさっきあなたのスカートの裾に名札みたいなものが付いていた。それじゃないか」

言われるままにその名札を見た。後ろ側の裾に縫い付けられている楕円形の名札で、そこには「三菱重工業株式会社相模原製作所 No. STB - 0874 一九九〇年四月」とあった。うすぼんやりとした記憶が蘇る。

「確か、このSTB - 0874というのが私の名前。製造番号ですよ」
 「〇八七四ねえ。ちょっと味気ないな。呼びのめんどくわらう」

名前にはちを付けられるのはけっして愉快なことではないが、実際のところ無機質なこの上ないのは事実なので、反論もできなかった。そうしていると彼女は何事か考え込み、手を打つ。

「お、わかかった。七四はどっだい。悪くないと思うんだが」

「八はどっこに消えたのですか。それと、私は貴方の名前を知りませと」
 もっともな疑問をぶつけたつもりだ。

「まず、私は河城にとり。谷カッパにとりだ。おんこく」
 「次の疑問だけど、それはあなたの出自と大いに関係がある。あなたは自分の名前を思い出せなかったが、自分がどんな存在かも思い出せないっ」

問われて考えてみる。そう、自分は作られた存在だ。何のために。一義的には日本国民の生命と財産を守るためだ。より直接的には、高い機動力によって戦場を駆け回り、分厚い装甲によって敵の弾を弾き、高い火力によって敵を撃破するためだ。そう、私は戦車だった。思い出したことを、私はにとりに告げた。

「うっ。あなたは戦車、それも私が調べた限りでは74(ルビィ)ななよん(式)戦車という戦車の付喪神らしい。だから七四。わかりやすいだろうっ」

「付喪神っ」

「うっ、うっ、うっ、大切に長い間使われたものが粗末に捨てられて化けた物らしいよ。そういうのは専門外だけっ」

「専門外なのにどっしりして私がそれとわかるのですかっ」

「んっ、あ、あなた……」

どっしりはそう言うって苦笑した。

「普通の戦車には二本の足は生えていないし、普通の人間はそんなにばかどかい大砲を抱えてないよ。あなたの体に付いている部品、調べたら74式戦車のものにそっくりなんだ。その行灯とかね」

視線の先にあったのは、なるほど奇妙な形で行灯としか形容できないものだ。私にはこれに見覚えがあった。

「赤外線投光器……」

「だから、私はあなたを戦車の付喪神と判断したわけさ。いつも通り商売をした帰り、あなたが倒れててね。付喪神なら構成部品を直せば起きるかもと思って直してみたら、見事直ったんだ。感謝して欲しいな」

私は素直に礼を言った。すると、彼女は我が意を得たりと言わんばかりに笑顔を浮かべた。

「当然、その分は働いて貰うから。いいねっ」

†

私がやらされたことはなんてことはない、重量物の運搬だった。行商のとき、今まで彼女が引いていた荷車を私が引く、それでもまだ余裕があったのでもう一つ荷車を連結する、まだ余裕があるので手押し車を追加する。人の姿になっても、戦車並の馬力が出せているらしい。科学的にこんなことが実現できるのかはなはだ疑問なのだが、そもそも私がこのように人の姿を取っていること自体が非科学的であるのだから意味のない疑問なのだろう。

私は、行商の過程で様々なことを知った。この世界は幻想郷と呼ばれていること、幻想郷と私たちがいた外界とは結界によって隔てられていること、結界の向こうは日本であること、幻想郷にも人間はいて、文化的生活を送っていること。そし

て、私は気がついた。私は国民の生命財産を守るために生まれてきた。そしてここは日本と地続きであって、国と呼べる物は存在しない。言い換えよう。ここは形式的に日本の一部であって、ここに暮らす人間たちは私が生命財産を保護すべき対象なのではないか？

そんな考えを巡らせながらにとりの後をついて妖怪の山へ向かっていると、前方から女性が息を切らして駆けてきた。その先には彼女を追う二頭の野犬、いや、犬にしては大きい。いわゆる、半ば妖怪化した獣の類なのだろう。私はにとりに目配せをして、右手の砲を持ち上げた。にとりは首を縦に振った。砲を目標に向けて、急に脳裏に電流が流れ始めたような気がした。わかる。今砲弾を放てば、どこに飛んでいくかが。徹甲弾は不要だろう。腰部に吊った弾薬箱から榴弾を取り出して装填する。私は引き金を引いた。

乾いた破裂音が場を切り裂く。それとほぼ同時に弾着し、目標付近にくぐもった爆発音がした。煙に包まれる目標の二頭、うち一頭は直撃を受け、もう一頭は砲弾から飛散した無数の破片を浴びたはずだ。通常の野生動物であれば、生きていられるはずがない。

しかし、やはり彼らは通常の野生動物ではなかった。煙から一頭が飛び出してくる。血を流し、目を光らせながらこちらに突進する。砲弾の再装填は間に合わない。どうもにとりはこちらに加勢する気はないようだ。お手並み拝見、ということなのだろう。私はもう一つの引き金を引いた。主砲と平行に取り付けられた車載連装機関銃が火を噴く。無数の銃弾が目標に命中するが、止まらない。飛びかかってくる。私はそれを主砲の防盾——最も装甲が分厚い部分——で受けた。

硬いもの同士が衝突する音がして、目標は悲鳴を上げた。今だ。私は徹甲弾を装填し、目標へと発砲した。

†

当然ながら、目標は跡形も残らなかつた。至近距離から音速の四倍を超える速さのタングステン合金柱を叩き込まれたのだから無理もない。
私はそれでも残った僅かな破片を吊ってやった。

「いやあお姉さん、災難でしたね。私のような善良な妖怪もそりゃあ沢山いますが、ああいう話の通じない連中もまだまだ多い！如何ですか、ここは一つ妖怪避けの発振器など買われては。歩くときの揺れで動いてあの手の下等な妖怪を寄せ付けない！ちよっと値は張りますが一生ものです。日割りで考えればこんなに安い買い物はありません」

にとり追われていた女性に妖怪避けグッズを売り込んでいるようだ。商売熱心なことだ。

ここ数週間で、私は河城にとりという人物（妖怪に対してこの表現が適切なのか、私にはまだ判断ができていない）を多少なりとも理解した。彼女は第一にエンジニアであり、そして商売人だ。彼女はエンジニアとしての興味から私を助け、ときどき私の構成部品を解析する。あるいは商売人としての打算から私をこき使っている。決してそれが悪いことだとは思わないが、真似をしようとは思わない。多分、近いうちに私は彼女のもとを去ることになるだろう。そう考えた。

†

実に意外なことだが、独自に行動したいという私の申し出を彼女はあっさりと受け入れた。おまけに、山の裾野にある空き家を世話してくれるという。正直なところ、私は何か裏があるのではないかと疑った。しかし、幾ら疑っても特に怪しげなところはなく、私は素直に好意に甘えることにした。

「じゃあ、私は行くから。何かあったら来るよ」
いつもよりどこか優しい様子で、にとりは去って行った。

それからの私は、幻想郷をあちこち彷徨っては妖怪に襲われている人間を保護する活動に精を出した。冬眠に備えて食いだめをしている妖怪熊が今まさに猟師に襲いかからんとしているところを徹甲弾で撃ち抜き、あるいは巨大な虫に追われている子供を助け出したりした。そして、ある夜。

私は悲鳴を聞いた。声の方へと行くが、新月で全く周りの様子がわからない。私は投光器を照らした。赤外線フィルタがぼんやりと赤く光り、夜の闇を一筋の光が切り裂く。その光は人間にとっては不可視であり、しかしそれは私にとって真昼のように明るい。その光線をあちこち振って、私は見つけた。少女の姿をした妖怪が今まさに子供に襲いかかろうとしているところを。私はそれに向けて射撃した。短切な同軸機銃の射撃に反応し、彼女はふわりと私のいる高度まで浮き上がった。

「折角の獲物を横取りすんなよ」